

明治村 だより

春号 Vol. 31

● 目次

- 内国勸業博覧会と幻の万国博覧会 橋爪紳也 ……2
- 明治万国博覧会 誌上見学会 ……4
- 催しものご案内 ……6
- 常設展「明治の椅子」 ……8
- 常設展「明治の時計」 ……9
- 新店舗紹介 ……10
- A La Meiji-mura ……11



テーマ館
【16 千早赤阪小学校講堂】
明治時代の国内外で開催された博覧会の概要紹介と、当時の展示物品、錦絵などをご覧いただけます。

機械館 【43 鉄道新橋工場】
殖産興業のシンボルである機械を展示するほか、一部を動態展示でご紹介します。

米国館
【38 シアトル日系福音教会】
1909年（明治42年）のアラスカ・ユークン太平洋博覧会を紹介します。

ブラジル館
【39 ブラジル移民住宅】
1922年（大正11年）に開催されたブラジル博覧会と、ブラジル移民に関する資料を展示紹介します。

ハワイ館
【40 ハワイ移民集会所】
明治時代のハワイの産業と移民に関する資料を展示紹介します。

子ども博覧会
【3 三重県尋常師範学校 蔵持小学校】
1906年（明治39年）子ども博覧会、1909年（明治42年）児童博覧会など、子供にちなんだ博覧会の資料を展示紹介します。

博覧会美術館
【16 東山製菓所】
明治の博覧会に出品された絵画（複製）を当時の世相とともに展示します。

衛生博覧会 【37 名古屋衛成病院】
衛生博覧会展示会場の様子とともに、まじない医療の玩具など当時の民間医療を紹介します。

万国博のバビリオン展
【7 帝国ホテル中央玄関】
万国博のシンボルとして親しまれた建造物と日本館の様子を紹介します。

展望タワー
【57 川崎銀行本店】

「明治村 だより」 第32号発行のお知らせ
発行時期 平成15年7月（予定）
申込方法 「明治村だより」第32号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料140円の切手とともに封書にてお申し込み下さい。

表紙 第三回内国勸業博覧会（部分） 永島孟齋 明治23年

平成15年3月15日発行
「明治村だより」第31号（平成15年 春）
発行 博物館明治村
〒484-0000 愛知県大山市内山一丁目
電話 (0568) 67-0314
◎ホームページ <http://www.meijimura.com>
製作 大日本印刷株式会社

明治萬国博覧会

誌上見学会

衛生博覧会 (37 名古屋衛成病院)

衛生博覧会は人体の構造や病気の知識などを人々に広めるため開催された博覧会です。マスメディアが発達していなかった時代だからこそ存在しえた博覧会でしょう。独立した博覧会として開催されたり、また、博覧会の一部門として開催されました。ヨーロッパでは1880年代からたびたび開催され、日本では明治10年(1877)上海から上陸したコレラが猛威をふるうと、医学的な治療よりも民間信仰に頼っていた人々に衛生観を植え付けるために、各地で衛生に関する博覧会が開催されるようになりました。

米国館 (38 シアトル日系福音教会)

アメリカでは数多くの万国博覧会が開催されました。ヨーロッパに比べ歴史の浅いアメリカでは、自国の領土の拡大を記念し博覧会を行なうことが多く、例えばアメリカ建国100年を記念したフィラデルフィア万国博覧会(1876)、コロンブスがアメリカを発見して400年を記念したシカゴ・コロンブス博覧会(1893)、ルイジアナ購入を記念したセントルイス博覧会(1904)、そして、このアラスカ・ユーコン博覧会はロシアから太平洋沿岸のアラスカ・ユーコン地方を購入したことを記念して1909年に開催されたものです。日本政府は日系移民の地位向上をめざすとともに、日米の通商関係の強化を図るため参加しました。

ブラジル館 (39 ブラジル移民住宅)

ブラジル博覧会は、ブラジル独立百年祭の記念行事として1922年に開催された博覧会です。この博覧会に日本政府が参加したのは当時軌道に乗りかけていた日本からブラジルへの移民事業を成功させるとともに日伯の通商関係をさらに強固のものとするためでした。開催期日がたびたび変更になったり、開催後も閉会日が何度か延長されたため途中で撤収する国があとをたちませんでした。また、開催直後にブラジル国内の内乱も勃発し、混乱を極めた博覧会でした。

機械館 (43 鉄道寮新橋工場・機械館)

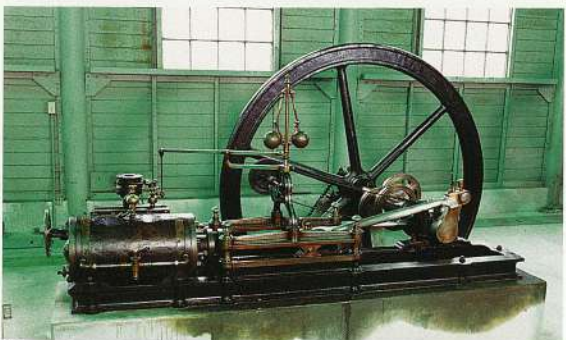
初期の博覧会は、特に産業革命が進んだイギリスでは、自国で製造される機械類の優秀性を示す機会となりました。これら欧米の博覧会に出展された機械類は、見学した日本人に驚きを与え、日本と欧米の距離を痛切に感じさせることとなりました。博覧会に随行した人々が中心となってそれらを輸入して国内に設置し、多くの工場などで使用されました。また、機械の国産化に大きな役割を果たしたといえます。



流行悪疫退さんの図



日本館 日本デー(10月31日)の様子



横置単筒蒸気機関

博物館明治村では3月15日から11月30日まで明治時代に開催された国内外の博覧会を紹介する「明治萬国博覧会」を開催いたします。この誌面では各会場のご案内をさせていただきます。

こども博覧会 (3 三重県尋常師範学校・葺持小学校)



こども博覧会記念絵葉書

こども博覧会は明治39年に東京の上野公園で開催されたのが最初で、大正天皇の第三子光宮誕生を記念して開かれました。それまでの博覧会は殖産興業を推し進めるため、出品物を競い合うものでしたが、こども博覧会は趣を異にし、最新の子どもの生活や教育に関するもの等を紹介する場でした。つまり、子どもに焦点を絞り、子どもに関する商品の購買意欲を促進する、現在のテーマパークやデパートの催事のような位置付けでした。明治39年のこども博覧会は同文館という出版社が主催し、明治42年の児童博覧会は三越呉服店、明治44年の山林こども博覧会は箕面有馬電鉄の主催で行われました。

テーマ館 (14 千早赤阪小学校講堂)



第五回内国勸業博覧会真景

国内外を問わず「博覧会」と名のつくものには、最先端の技術を紹介するもの、旧態依然とした姿勢で生産されたものなど様々なものが国内から多数出品されました。このテーマ館では明治村所蔵の歴史資料の中から、国内外の博覧会に出品されたものや、博覧会への出品がきっかけとなって普及したものを展示します。

また、会場内では1900年のパリ万国博覧会の様子を映画の発明者・リュミエール兄弟が撮った映像と、明治初期の博覧会で好評を博した「名古屋城の金のシャチホコ」の古写真・錦絵を覗きカラクリ風にご覧いただくことができます。

博覧会美術館 (16 東山梨郡役所)

初期の万国博覧会では産業技術の成果の披露が第一義でしたが、そのほか各国の伝統的な芸術品も展示されました。日本も数々の美術品を出品しましたが、万国博覧会と国内で開催された博覧会とはその取り扱い方が異なっていました。万国博覧会ではその国のエキゾチズムを紹介する材料の一つでしかなかったようです。一方、日本国内で開催された博覧会の美術展示のありようは、時代によって大きく変化しています。第1回内国勸業博覧会の時には「美術」は産業技術を支える一つの部分として位置付けられており、第3回内国勸業博覧会になると新たな美術の流れを紹介する場となりました。これまでの日本の美術観と大きく異なる黒田清輝の「朝妝」(第4回内国勸業博覧会出品)は新たな日本美術の局面を開いた典型といえます。

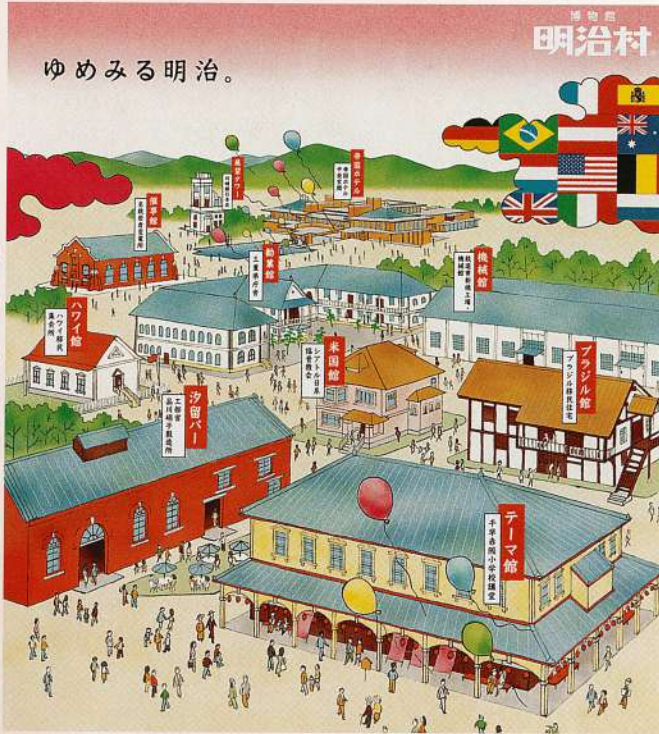
明治萬国博覧会

2003年3月15日(土) ~ 11月30日(日)

この「明治萬国博覧会」では、村内全体を明治の博覧会風に装飾するとともに、村内の歴史的建造物を展示館として使用し、明治時代に開催された国内外の博覧会とその出品物等を錦絵や画像も交え、様々に展示・紹介いたします。

各パビリオンと特別展示

- テーマ館** <⑭千早赤阪小学校講堂>
- 機械館** <④③鉄道新橋工場>
- 米国館** <⑳シアトル日系福音教会>
- ブラジル館** <㉑ブラジル移民住宅>
- ハワイ館** <④④ハワイ移民集会所>
- こども博覧会** <③三重県尋常師範学校・蔵持小学校>
- 博覧会美術館** <⑬東山梨郡役所>
- 衛生博覧会** <⑦名古屋衛戍病院>
- 万国博のパビリオン展** <⑥帝国ホテル中央玄関>



ゆめみる明治。

明治村

「博覧会ガイドブック」発売!

大人700円 小人500円 (市電・SLの1日乗車券つき)
明治萬国博覧会の見学に役立つ、楽しくお得なガイドブックです。

新設店舗

デンキブラン「汐留バー」

<④⑤工部省品川硝子製造所1階&前庭>

和雑貨「楽」

<③⑥歩兵第六聯隊兵舎1階>



移築復元

汐留火力発電所

<④⑤工部省品川硝子製造所 前庭>

日本の鉄道発祥の地、汐留。その新橋駅構内に明治35年、火力発電所が築造されました。高さ約25mの煙突を備えたこの施設は、構内の工場など各施設で必要とされる電力を供給していました。発掘調査により発見された煙突の基礎部分は、整然とした煉瓦組みの土台が25段、ピラミッド状に積み上げられていました。東京都から寄贈を受けた掘り出された当時の煉瓦を用いて、煙突の基礎部分(幅約4m四方、高さ約1m)を復元、公開いたします。

<デンキブラン>

常設展示のご案内

明治の暮らし よろず体験

<⑬三重県庁舎 2階>

明治村所蔵の、明治時代から大正時代にかけて使われていた暮らしの道具を展示します。「あさ・ひる・ばん」と一日を追いながら、桶かつぎ、昔の遊び体験、ろうそくやランプの明るさ体験などを通して、明治の暮らしを体感して、楽しんで下さい。

明治の時計

<⑬三重県庁舎2階>

明治時代の懐中時計、ぼんぼん時計など数多くの時計が展示され、今でも時を刻んでいます。時計が描かれた錦絵・暦も展示いたします。

明治の椅子

<⑬三重県庁舎 1階>

赤坂離宮建設時(明治42年)にフランスから輸入された椅子をはじめ、鹿鳴館・明治宮殿等で使用された明治時代の椅子を展示いたします。

トイレの館

<⑤⑩菅島燈台付属官舎>

明治・大正期には染付(白地に青い模様)や青磁(薄い緑色)など美しい色や図柄の便器が作られていました。ここでは、明治時代に使用されていたバラエティーに富んだ便器を展示いたします。

ガラス絵ギャラリー

<④⑤工部省品川硝子製造所 2階ギャラリー>

長く新創作協会や日本ガラス絵協会で精力的に活動されてきた、加藤金一郎氏の心暖まるガラス絵を展示いたします。

※催事は都合により変更する場合がありますので、詳細については事前にお問合せ下さい。

春の明治村



明治村ウエディングフェア

4月27日

<帝国ホテル中央玄関・聖ザビエル天主堂・岩倉ホール>
明治村では歴史的建造物を利用して挙式を行うことができます。明治村での挙式を予定されている方、式場をご検討中の方のためにブライダルフェアを開催いたします。お問合せ ☎ 0120-78-2205
明治村ブライダルデスクまで

絶景! 気球体験

5月3日~5日

<帝国ホテル中央玄関前 芝生広場>
明治萬国博覧会開催中の明治村を、空から望んでみませんか。
大人500円、小人400円(入村料別)

花のナイター

5月3日~5日 20:30まで開村

- 花のライトアップ
<村内各所>
- 教会ライティングコンサート
<聖ザビエル天主堂>
18:30~ 19:20~
- 花火競演
<帝国ホテル中央玄関前 芝生広場>
20:10~

建物ガイド

西郷従道邸・東松家住宅・呉服座・西園寺公望別邸「坐漁荘」

普段入れない建物の内部をガイド付きで公開します。

時間
11:00 11:20
11:40 13:00
13:20 13:40
14:00 14:20

ボランティアガイド

● 定期ガイド

30分の定期コースガイド。
正門ブース 11:00出発 13:30出発

● 予約制ガイドツアー <要予約>

団体のお客様を対象にした予約制のツアーです。ボランティアガイドとともに明治村の貴重な建造物をもう一步踏み込んで見学してみませんか。所要時間は1時間~1時間30分。モデルコースもいろいろ取り揃えています。予約 ☎ 0568-67-0314

プレミアムガイドツアー <要予約>

明治の貴重な建造物など文化財を、案内付きの電動車で巡る予約制のガイドツアーです。見学コースはお客様のご希望に合わせて設定いたします。所要時間は1時間30分。料金は4名様まで10,000円、5名様12,000円、6名様14,000円です。(入村料別)
予約 ☎ 0568-67-0314

第37回 明治村茶会

好評発売中

4月17日・18日

明治の建造物を茶席として用いるお茶会です。名品鑑賞とともに春爛漫の明治村を一日ゆっくりお楽しみいただけます。

坐漁荘・亦楽庵席 大本山相国寺 承天閣美術館

相国寺境内にある承天閣美術館は、四点の国宝、百点を数える重要文化財を含む鎌倉・室町から江戸期にわたる墨蹟・絵画・工芸品や茶道具が多数収蔵されています。その中から選りすぐりのお道具をご出品いただけます。名品の取り合わせをお楽しみ下さい。

学習院長官舎席 メナード美術館

国内外の近・現代の作品を中心としたコレクションの中から、近代の巨匠が生み出した個性的な茶道具の取り合わせをお楽しみ下さい。

日本庭園・野点席 鈴木五郎

織部・志野・黄瀬戸を中心に、ダイナミックな作品で知られる陶芸家、鈴木五郎氏の作品と珍しい「大茶盛」の茶席をお楽しみ下さい。

会費 15,000円(前売りのみ)
内容 茶席三席と点心席・模擬店
お問合せ ☎ 0568-67-0314
明治村茶会事務局



SL機関士体験 <要予約>

4月19日、5月11日

明治時代に実際に走っていた蒸気機関車の機関士になってみませんか。
村内を走る蒸気機関車12号は明治7年に輸入されたイギリス製で、日本最古の機関車のひとつです。9号は明治45年にアメリカから輸入した機関車です。

対象:小学生 体験料:400円(入村料別)
明治村ホームページ「お問合せ」からも予約ができます。
予約 ☎ 0568-67-0314

明治村写真コンテスト「明治村百景」

募集締切 平成15年6月30日必着

テーマ 明治村の風景

サイズ

一般 カラープリント四つ切り写真(ワイド四つ切り可)
デジタル部門 A4サイズにプリントアウトしたもの

賞

【一般】	明治村賞	1点	賞金10万円
	大賞	2点	賞金5万円
	特選	3点	賞金3万円
【デジタル】	大賞	1点	賞金5万円
	特選	2点	賞金3万円
	他入選、佳作を設けています。		

● 応募について

応募票に氏名、住所、電話、撮影条件(タイトル、日時、天候、使用カメラ、レンズ、フィルム、シャッタースピード、絞りなど)を明記して下さい。(自作可)

※デジタル部門では使用カメラ、画素数、加工方法を併せて明記してください。

問合せ 博物館明治村「写真コンテスト」係

電話 (0568) 67-0314

ホームページmeijimura.comから応募票のプリントアウトができます

作品募集中

明治の椅子

博物館明治村では鹿鳴館、明治宮殿、赤坂離宮などで使用された椅子、明治から大正にかけての建築家によってデザインされた椅子あわせて約300点を収蔵しています。これは数の上でも、歴史的な意味でも他に例を見ない日本有数のコレクションといえると思います。これまで当館では西郷従道邸や三重県庁舎などで、実際に座ることが出来る体験的な展示に使用してまいりましたが今回新設する常設展示は体験的な展示とは別に、椅子の歴史的な側面を紹介するものです。

桜蒔絵小椅子

鹿鳴館使用 明治二十年製作

国産の椅子としては初期のもので、明治十六年に、不平等条約改正を目的にイギリス人のお雇い外国人コンドルにより設計された鹿鳴館で使用されたものです。当時裾が広がったドレスでダンスをする女性の休憩用につくられたためか、肘掛のないタイプになっています。椅子のスタイルはイギリス十九世紀様式、装飾は日本の伝統的な黒漆に蒔絵で日本の花のシンボルである桜が描かれています。



肘掛椅子

明治宮殿使用 年代不詳

明治宮殿の大食堂、豊明殿で使用されたものです。明治宮殿の家具の詳細は現在のところわかっていませんが、ドイツ北部ハンブルグに本社があり、横浜に日本の代理店を置いていた、カールローデ商会を通じて大半を購入したといわれています。木部にはルネッサンススタイルを彷彿とさせる彫刻が施され、やや堅い印象を受けますが、革製の背は天使が植物文様で装飾されその印象を和らげています。



菊花御紋章付肘掛椅子

赤坂離宮使用 一九〇六年ごろ製作

赤坂離宮は当時皇太子であった大正天皇のために建設された宮殿です。このフランス製の椅子は大食堂、花鳥の間で使用されたものです。濃紺に染められた山羊皮に金箔の型押しで装飾し、背には十六葉の菊花が描かれ、華やかな印象を与えています。脚はルイ十六世様式の特徴である細かな縦溝が彫られています。



竹製小椅子

明治宮殿使用 一九一〇年ごろ製作

一九一一年にイタリアのチュラン(トリノ)で開催された博覧会に出品されたものです。この椅子は単純に竹を曲げ形づくっているだけに見えますが、実際その技術はかなり高度なもので、現在同じものを作るのは困難といわれています。

また、宮殿で使用された家具には室内のデザインに合わせて誂えられたものと、献上品や博覧会などに出品されたもののお買い上げがありますが、この椅子は後者にあたるのではないかと推測されます。



明治の時計

三重県庁舎二階の時計展示室には明治時代に外国から輸入された時計とともに、日本で製造された多くの時計が展示されています。

日本は明治維新後、諸外国との暦日の相違が不便になり、明治政府は明治五年(一八七二)十二月三日を明治六年(一八七三)一月一日として江戸時代から使われてきた太陰暦を太陽暦に切り替え、一日を二十四時間とする定時法を採用しました。今からちょうど百三十年前のことです。これによりこの展示室にも展示されているセス・トーマス (Seth Thomas) 社、アンソニア (Ansonia) 社などをはじめとする外国製の時計が数多く輸入され、当時の郵便局や役所、交番などで人々に時を知らせるようになりました。明治七年三代安藤広重の「四日市駅通寮」^{※1}では建物の上部に時計が描かれ「毎半時^{※2}報鐘夜中点灯」とあり、人々の生活に時計が入ってきたばかりの頃の様子が表現されています。

当時、アメリカ製の掛時計は十五円から三十円、ドイツ製は五十円以上もしていました。この頃の職人の月給は七円から八円ほどだったので庶民にとって時計は非常に高価なものでした。そこで、舶来時計をモデルとして安価で品質の良い国産掛時計を作ろうと試みる人たちが現れ、明治八年(一八七五)日本で最初の時計工場「金工社」が掛時計の生産を始めました。同社は同十四年(一八八二)第二回内国勸業博覧会に掛時計を出品し褒賞を受けています。数年後金工社は解散してしまいましたが、その後多くの時計会社設立され、時計は日本中に行き渡るようになっていきました。

初めての国産掛時計が製作されて今年で百二十八年、絶え間ない技術開発により現在日本は世界有数の時計生産大国になっています。

明治村では一週間に一度、展示されている時計のゼンマイを巻いて動態展示を心がけています。その中から四台の時計をご紹介します。

自動地球儀時計

(明治三十三年 豊橋時計製造会社製)

時計の機械に連動して上に付いている地球儀が一日に一回転するしくみになっていて、世界地図の地名は英語で表記されています。これは当時地学の教材用の時計として市販されていましたが、現在では完全なものはほとんど残っておらず非常に貴重な製品です。



八角合長掛時計

(明治二十六年頃 精工舎製)

八角合長とは、文字盤を囲っている八角形の部分と比較して振り子室の部分の長さが短い型のことです。この時計の振り子室のラベルには「ISHIWARA HONJO」と表記されています。

精工舎(現在はSEKO)は明治二十五年(一八九九)古物商の息子、服部金太郎が東京市本所区石原の工場で工員十人ほどを雇い、掛時計の生産を開始したのがはじまりです。創業まもなくの日清戦争の勝利によって国民の経済力が豊かになったおかげで、同社の時計は新製品が次から次へと造られ、爆発的に売れて急発展します。この時計は精工舎の創業二年目に造られた、極めて初期の製品です。



四ツ丸掛時計

(明治末期 福田時計製)

福田時計は明治四十二年(一九〇九)名古屋で設立されました。この製品は、元は全体が黄金色に塗られていた時計で、表面は漆に弁柄^{※3}を混ぜた「箔下漆」を塗って、その上に金箔を貼り、さらに透漆を塗って仕上げであり、日本の伝統的な漆芸技法が採り入れられています。時代を経て塗料が剥落していますが、製作当初の気品ある美しさの名残を留めている時計です。



ホール置時計

(明治時代 ドイツ、ゲスタブ・ベッカー社 Gustav Becker 製)

高さが二百四十四センチの輸入時計で、人が大勢集まる広間等に置かれていたことからこの名があります。この時計は錘が重力により下がる力で機械を動かす「錘式」が特徴です。現在も二個の錘に付いている鎖を下へ引っ張り、錘を上へ位置まで上げるとゼンマイが巻かれた状態と同じ状態になり、二日半ほどかけて非常にゆっくりと錘を下げていきながら時を刻んでいます。



※1 当時の郵便局のこと。
 ※2 現在の一時間毎。
 ※3 ベンガラ 黄色みがかった赤色の顔料。



明治村には、三重県庁舎の他に、この木目塗が使われている建物として⑯東山梨郡役所 ⑳菅島燈台付属官舎 ㉑長崎居留地二十五番館の三棟があります。

三重県庁舎の木目塗

⑬三重県庁舎は一年半の月日を経て、明治十二年の十二月に完成しました。その扉や窓の額縁は「木目塗」という技法で塗装されています。ペンキの木目塗は洋風建築とともに西洋から伝えられた技法で、木の素地を見せず、木目の濃い色に合わせた乾きにくいペンキを塗り、乾燥する前に、櫛形・ゴムヘラ等の道具を用いて木目状に掻き取ることで、別の高価な木材の木目を描く方法です。

日本初のペンキ塗りの建物は、安政元年のペリーとの話し合いの場として、急遽つくられた談判所と伝えられています。行なったのは江戸の洪塗り職人町田辰五郎で、彼は伝統的な材料と技術で色や艶を出していましたが、これを見かねたアメリカの役人のはからいで、軍艦にあったペンキをもらいうけ、乗組員からその手法を教えるもらいました。その後、彼は各国からペンキ材料を購入し、業務を広げていきました。

漆の木目塗については、日本の建物の古い例では奈良県の国宝・当麻寺本堂の須弥壇（鎌倉時代前期）が知られています。明治維新後に油性塗料が多く入っていると、洋風建築ではよくペンキが塗られ、木目塗も多く用いられるようになりました。しかし、昭和になると戦争の影響もあって、木目塗は次第に行われなくなり、戦後になると代わりに写真製版による木目の印刷や、美しい木目の木材を薄く切って他の木材に張り合わせた、木目調の合板が発達しました。ヨーロッパの国々では木目模様を塗る技法が古くから行われており、現在でも一般的に用いられています。

また、大井牛肉店の看板には長寿を司る縁起物の鶴の彫刻が取り付けられています。この鶴は「戻り鶴」と呼ばれ、お客様が再び戻ってくるという願いを込めて、商店の軒先に取り付けられることがありました。この様に大井牛肉店では、目立つ軒先と擬洋風建築を取り入れ人々の目を引く店構えになっています。



代には一般的に使用されるようになりました。特に、この大井牛肉店のように擬洋風建築の中に唐破風を取付ける事が多かったようです。様々な伝統のある破風の中から唐破風が選ばれた理由は、唐破風が破風の中で一番格調が高いからと、二度反曲するカーブは直線や単純なカーブを好む日本の美学の中では異質で、その重量感や形がヨーロッパの建築に通じるものがあると考えられたからです。このため、日本の大工の棟梁の多くは洋風住宅を真似て造る際は唐破風を用いました。

西洋建築の中に使われた唐破風屋根

②大井牛肉店は岸田伊之助が明治二十年頃、牛肉販売と牛鍋の店として建てたもので、当時、神戸等の開港場には、外国の商館の建ち並んだ新しい街並みが次々と形成され、大井牛肉店もこの街並みに相応しい西洋建築の手法を取り入れた建物になっていきます。しかし、何故かこの建物に違和感を覚えるのは、コリント式のオーダーの柱とペランダを備えた本格的な洋風建築の中に使われている、日本風の唐破風屋根と看板の存在のためではないでしょうか。

このように、洋風と和風の混じった建築は「擬洋風」と呼ばれ、明治初期から明治二十年頃、多く造られた建築様式です。破風には建物の中への雨や風の侵入を防ぐ役割があり、神社や城郭建築等の高尚なものに用いられましたが、身分制度の取り払われた明治時代には一般的に使用されるようになりました。特に、この大井牛肉店のように擬洋風建築の中に唐破風を取付ける事が多かったようです。様々な伝統のある破風の中から唐破風が選ばれた理由は、唐破風が破風の中で一番格調が高いからと、二度反曲するカーブは直線や単純なカーブを好む日本の美学の中では異質で、その重量感や形がヨーロッパの建築に通じるものがあると考えられたからです。このため、日本の大工の棟梁の多くは洋風住宅を真似て造る際は唐破風を用いました。

「リードオルガンについて」

⑥聖ヨハネ教会堂の二階へ上がると、そこには周りの喧騒とかけ離れた肅々とした空間があります。そしてその傍らには、オルガンがひっそりとたたずんでいます。

オルガンには、パイプオルガン、リードオルガン、ハーモニウム等があり、パイプオルガンの音が源がパイプであるのに対し、リードオルガン、ハーモニウムはリードによるという違いがあります。また、構造はパイプオルガンとハーモニウムが加圧式であるのに対し、リードオルガンは減圧式であり、響きがそれぞれ異なります。



日本でリードオルガンが広く普及し始めたのは明治十年代で、いち早くオルガンを導入したキリスト教会は、主にプロテスタント系外国人宣教師らによって独自に音楽教育を展開していきました。その役割を担ったオルガンが聖ヨハネ教会堂にあります。

昭和五十四年に松山初子氏から寄贈されたオルガン(※1)はその一台です。この松山家のオルガンは、初子氏の御祖父松山高吉師(※2)が京都平安教会の牧師の頃に、自らアメリカから取り寄せて教会や日曜学校のオルガン奉仕をしていた時のものです。こうした活動や、讃美歌から確立した唱歌の普及により、オルガンは徐々に公立学校に導入され、近代音楽教育がなされていきました。しかし、この唱歌によって西洋音楽が定着したわけではありませんでした。次第に軍国主義が強まり、音楽活動は軍隊のための偏ったものに制限されていきました。それでもこの松山家のオルガンは、その世相や戦禍、その他の苦難に耐えてここにあるのです。

※1 Smith American Organ Company製 (1905年〜1909年)
10ストップ 61鍵
※2 明治初期キリスト教の先覚者で和訳聖書に尽くした人

明治村に新しいお店ができました

デンキブラン 汐留バー

〈45 工部省品川硝子製造所1階&前庭〉

100年前の赤レンガを使い、3月15日オープン!

昨年博物館明治村は、東京都から汐留の再開発で発掘された明治時代の赤レンガの寄贈を受けました。この発掘された100年前の赤レンガをパーカウンターや内外装に使い工部省品川硝子製造所内とその前庭に明治村初のバー「汐留バー」をオープンいたします。

看板メニューの「デンキブラン」をはじめ「香露葡萄酒」「エスプレッソ」「ドライフルーツ」「ホットショコラ」「生ショコラ」などがお楽しみいただけます。



工部省品川硝子製造所

異国情緒の不思議な味わい

神谷傳兵衛氏は、明治13年(1880)酒の一杯売りをする「みかはや銘酒店」(現・神谷バー)を東京浅草に開業します。神谷氏は三河出身で後に名古屋鉄道の前身の1つ、三河鉄道の社長も務めた人物です。氏は、輸入葡萄酒を元に日本人の口に合う葡萄酒の再製に取り組み、明治14年、渋味を抑え甘味を加えた「蜂印香露葡萄酒」が誕生します。この甘い葡萄酒は滋養と健康そしてハイカラなイメージで大人気となります。そして次にブランデーの調合に取り組み、明治26年頃、日本初のカクテル「デンキブラン」を考案します。当時の名前は「電気ブランデー」。電気が珍しい明治の頃、目新しいものという「電気…」と呼ばれており、当時はアルコール45度という強さのために電気のイメージにぴったりでした。舶来の洋酒がまだ珍しい時代、ブランデーをベースにワイン、ジン、ベルモット、キュラソーなどをブレンドした不思議な味わい、あたたかみのある琥珀色、ほんのりとした甘味の「デンキブラン」は異国を味わう特別なお酒でした。



和雑貨「楽(らく)」

〈36 歩兵第六聯隊兵舎1階〉

明治時代に誕生、香水のお香「香水香」

香の源流は四千年程前の古代インドまでさかのぼります。そこから東に伝わった香は、香木という固体から現代のお香・お線香へと進化し、西へ渡った香は、香油という液体から西洋の香水文化へと発展しました。明治の時代に西欧から到来した香水は、新しい世を象徴する香りとして世間一般に広まりました。明治末期、日本伝統のお線香作りの技術を用いて、香水のように華やかな新しいお香が誕生します。香水のお香「香水香」です。西と東の出会いで生まれたこの「香水香 花の花」は、大正時代に多くの人々に愛され、現代に受け継がれています。



〈香水香 花の花〉

新設ショップ和雑貨「楽」は、「香水香 花の花」などの各種香製品、尾張・美濃地方の陶器、和紙工芸品と布製品、置物などを取り揃えた「和」の専門店です。



歩兵第六聯隊兵舎